

R8.1.29 サンプル事例

Aさん（84歳）は戸建住宅で一人暮らしをしている。夫は10年以上前に他界しており、現在は市内に住む長男が週に1回程度様子を見に来ている。近隣との付き合いはほとんどなく、日常的に連絡を取り合う相手は長男のみである。

最近、近所の商店から「同じ商品を短時間のうちに何度も購入している」「支払いを忘れて帰ろうとしたことがあった」と地域包括支援センターに相談があり、これをきっかけに介護保険の申請が行われた。本人は「年を取ったから少し忘れっぽいだけ」「人の世話になるほどではない」と話しており、支援が必要な状態であるという自覚は乏しい様子であった。

自宅を訪問した際、室内は大きく散らかってはいないものの、新聞やチラシがテーブルの上に積み重なっており、いつのものか分からぬ食品が冷蔵庫内に残っていた。身だしなみは概ね整っているが、会話の中で同じ話題を繰り返す場面があり、日時や曜日の認識に混乱がみられた。

食事は簡単に済ませることが多く、調理は「面倒だからあまりしたくない」と話す。変形性膝関節症による膝の痛みもあり、以前は毎日のように出かけていた買い物も、現在は週に1~2回程度に減っている。外出が億劫になったことで、日中はテレビをつけたままうたた寝をする時間が増え、夜間に眠れず起きていることがあると本人は語った。

服薬については「ちゃんと飲んでいる」との自己申告があるが、実際には飲み忘れがあることを長男が確認している。通帳や印鑑は本人が管理しているものの、公共料金の支払いを忘れて督促が届いたことが一度あり、長男が対応した経緯がある。本人はその出来事をはっきりとは覚えておらず、「そんなことはなかったと思う」と話している。

長男は「できる限り母の一人暮らしを続けさせたい」と考えている一方で、火の消し忘れや体調急変時の対応を不安視している。電話では同じ内容の話が何度も繰り返されるようになり、最近は対応に疲れを感じることが増えてきたとも話していた。

その後、日中の活動性を保つ目的でデイサービスの利用が開始された。当初、本人は「知らない人の中に行くのは気が進まない」と消極的であったが、利用開始後は「行けばまあ楽しい」「体操をすると膝が少し楽な気がする」と話すようになった。職員からは、入浴や集団活動には概ね参加できているものの、時間の見通しや曜日の理解が不安定であるとの報告があった。

一方で、夜間の不眠や昼夜逆転傾向は続いており、日中に居眠りをすることで生活リズムが乱れている様子がみられる。長男からは「今後、どこまでサービスを増やすべきか判断に迷っている」「母の気持ちを尊重したいが、安全面を考えると不安が尽きない」との相談が寄せられた。

関係職種からは、今後の認知症の進行を見据えた関わりや、服薬管理・生活リズムの調整を含めた支援の必要性が指摘されている。一方で、本人は「できれば他人を家に入れたくない」「これ以上世話になるのは嫌だ」という思いを繰り返し述べており、支援の進め方については丁寧な説明と調整が求められている。